
ブランチア人魔戦記

長村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブランジア人魔戦記

【Nコード】

N8617Z

【作者名】

長村

【あらすじ】

こことは異なる世界の、とある地方にあるブランジア王国。

これは、人間と魔族の戦いの物語。

記憶喪失の少年、ショーマはあらゆる魔法を瞬時に覚えてしまう『能力』持っていた。望まない力を正しく制御出来るようにと望んだ彼は騎士士官学校において魔法を学ぶこととなった。

そこで出会う、誇り高き少女メリル。勇気ある少年レウス。そして、多くの仲間達。

彼らとの出会いにより、シヨーマの心に目覚める想いがあつた。
出会い、夢を語り、ともに戦い、別れ、そしてまた出会う。
その果てに、何を見るときのか。

始まりの1日 (1)

鳳凰歴306年。30年に渡る西と東に並ぶブランジア王国とイギリス王国の長い戦いは、イギリス王国王都ロドニスへの奇襲作戦の成功により、ブランジア王国の勝利に終わった。

それから3年。復興の続くブランジア王国ではある問題が発生していた。戦争末期より急増し始めた『魔族』の脅威である。精鋭揃いとはいえ、長い戦で消耗し、治安維持活動にも戦力を割いていた騎士団ではこれに対応しきれずにいた。

そこで、300年以上の歴史において、多くの騎士を輩出した名門リヨール士官学校を一般にも開放し、若い力を広く育てることで、急ぎ騎士団の戦力を増加させることとなった……。

人魔戦争と呼ばれる新たな戦いの前哨である。

シヨーマ・ウォーズカは記憶喪失であった。

黒い髪に、見慣れぬ格好、高級そうな眼鏡をしたその不思議な少年は、山の中で倒れていたところを老人オードランに助けられ、少しずつでも自分の記憶を取り戻そうと、彼とその妻の三人で静かに暮らしていた。

しかし彼には、とても静かには暮らせないであろう能力があった。

魔法の『瞬間修得』である。

魔導師を志す者が最初に覚えるのに相応しいとされる初級魔法、『アイスショット』ですら、修得に2週間はかかるのが普通であるところを、彼は教本を一読しただけで修めたという。

初級魔法を容易く修得する……。それは才能ある者にはままたる

ことではあったが、彼の能力はそうではない。高位魔法の『サンダー・ストーム』も同様に一読で修得したというのだ。2度ならば偶然で済ませたところであったが、後の検証により彼はさらに3度、計5つの魔法を同じように瞬時に修得したという。

記憶を失う前の彼は大魔導師であり、『修得した』のではなく『思い出した』のか。とも予想されたが、彼はまだ20にも満たない若者である。それは無いだろう。やはり、本当に彼だけの『特異さ』なのか。判断の難しいところであった。

いずれにせよ『経験の伴わない力』は彼自身をも危険にさらしかねない。そう判断したオードランは、ショーマ・ウォーズカの正体を保留とし、彼を正しく魔法の修練ができる騎士学舎へと預けることを決めたのだった。

「とは言っけどね……」

当のショーマは正直途方に暮れていた。

穏やかに日常生活を送る程度には問題の無かったショーマの記憶喪失ではあったが、都会に出て集団生活を送るともなれば、さすがに面倒も多いに決まっているだろう。

まずは記憶を取り戻してから、と行きたいのだったが、恩人であるオードランのお爺さんの言うことも否定しにくい。自分の記憶を取り戻すことは確かに大事だが、他人に迷惑をかける危険性を孕んだままであることが良いことなわけが無いのだ。

急いで事は仕損じる。何もわからないなら、まずは今ある自分を固めてからだ。

オードランのお爺さんの経験則らしい。

「うん、そうだな。……頑張ろう」

厳かな石造りの門。リヨール士官学校を前にしてショーマは1人、決意を固めていると、

「ああ、頑張ろう！」

「うわっ」

いつの間にか隣に立っていた同世代くらいの少年に同意された。緩やかに波打つ金髪と、育ちの良さを感じさせる柔らかな笑みが印象的な少年だった。もちろん、今の記憶には無い人物である。

「ええっと……」

たじろいでいると、金髪の少年は自分から語り始めた。

「僕はレウス。レウス・ブロウブ。君がシヨーマ・ウォーズカ君だよ。兄から話は聞いているよ」

レウスと名乗った少年は気さくそうに微笑んだ。

シヨーマもブロウブという姓には覚えがあった。オードランと暮らしていた小さな山村であるリウルの村から、シヨーマをこの学術都市リヨールまで連れてきてくれた上、士官学校の入学や生活する寮の手配までしてくれた人物だ。手際良く物事を進めていく様子は、少し見るだけでも彼の優秀さを感じさせた。

なんでも騎士として歴史のある結構な名門の家系だとか。

「あ、ああ。その節は本当にどうもありがとう。こっちも色々大変でさ。本当、助かったよ」

「どういたしまして。……申し訳無いが、兄はあれで結構忙しい人なんだ。だから学校では、代わりに僕が君の助けになろうと思う。ちよつど同じ時期に入学する事が決まっていたし。構わないかな？」
裏の無い笑顔にシヨーマは安心感を覚える。今の彼にとって、当てにして良い人物がいるというのは、それだけで随分と心を落ち着かせてくれるものだった。

「ああ。ありがたい話だよ。迷惑をかけると思うけど、どうぞよろしく頼む」

そつと手を差し出すシヨーマ。レウス気の良い笑顔ではそれをぎゅっと握り返した。

入学式は式というほど大袈裟なものではなく、学長による挨拶程度で終わってしまった。そんなことに時間を割くなら、生徒達は1秒でも多く教練に励めということである。

「……その髪はこの国の生まれでは無いよね。やっぱり外国から何かの用事でやって来たけれど、不幸な事故か何かで……。つてところかなあ。やっぱり」

シヨーマ達新入生は最初の授業が始まるまで教室で待機中である。退屈をもて余す学生達は、新しい友人達と交流を深めるため談笑中だ。

そんな中シヨーマは、人の少ない一番端の席について、レウスと自身のことについて相談していた。

「でも隣国のイーギリスにもそんな髪の人はいないし、もっと遠くからかな？」

ここブランジア王国や東に隣接するイーギリス王国の民は金髪や茶髪がほぼ全てである。シヨーマのような黒髪はまずいない。よってレウスは彼をイーギリスより、さらに東方からの出身ではないかと予想した。ブランジアの西はかなり広い海しか無いので、海を越えてきたという可能性は低い。ゼロでは無いが。

「でも敗戦の影響でまだまだ治安の安定しないイーギリスの国境を1人で越えられるとは思えない。もしそうなら仲間がいるんだろうけど、捜してくれている様子も無い。君のような目立つ人を捜しているなら噂も聞くはずだがそれも無い。その眼鏡はそこそ高級な物のように見えるし、それなりの身分であるならなおさらだ。」

この国の地理に関する記憶も無いシヨーマにとって、次々と情報を挙げてくれるレウスは心強い。出てくる結果は空しいものばかりだったが。

「うん。……本当、何なんだろうね。俺は」

真剣に考えてくれているレウスに、シヨーマは嬉しさと共に申し訳無さも感じてしまう。

「あまり急がなくても良いよ。今はまず魔法の勉強からしてみたいしな」

「そうか、うん。わかった。そう簡単に結論は出ないか」

話が一区切りしたので、2人は軽く教室の様子を見渡す。

120名の新入生は3つの教室に分けられ、今は40名の生徒達がこの教室に詰め寄っている。

「本来は貴族や騎士の家系か、その推薦を受けた人しか入学できなかったんだけどね。魔物の増大に対してその考えは改められたみたいだよ。平民からもたくさん志願者がいて、例年に比べると倍以上の新入生らしい」

「へえ……」

と、言われても貴族や騎士、平民の違いなどシヨーマにはよくわからない。これがどれくらい多いのかというのもぴんときなかつた。「でもやっぱり名のある騎士の生まれも多いみたいだね」

「……俺にはわからないよ」

「はは、そうだね。例えば、あそこにいるのはガランマ家の次男だし、あつちで人だかりが出来ているのはララニー家の三男。それから、目の前の席にいるのがドラニクス家のご令嬢。だよな？」

話の流れとはいえ、突然前の席にいた金髪の少女に身を乗り出して話しかけるレウスにシヨーマは少し驚く。気さくだとは思っていたが。

声をかけられた少女はゆっくりとこちらに振り向いた。

「……こんにちわ」

美しく気品のある金髪と、宝石のようにきらめく碧眼、決め細やかな肌とで整った顔立ちの、いかにもな美少女であったが、笑顔のレウスとは対称的な、機嫌の悪そうな仏頂面がそれを減じていた。

「……なにか嫌なことでもあったのかな」

「貴方に話しかけられたせいかしらね」

「ひどいなあ」

2人は軽口を交わしあう。どうやら顔見知りであるらしい。シヨーマが置いてきぼりにされた気分していると、レウスはすぐに彼女を紹介してくれた。

「ああ、こちらメリル・ドラニクス嬢。彼女の家と僕のブロウブ家は昔から家族ぐるみで付き合いがあつてね。なんだか僕は彼女に嫌われているようだけでも」

確かに愛想が良いと言えば良いのだが、裏を返せば馴れ馴れしいとも言える。それがレウスという少年だった。シヨーマにはそれがありがたいのだが。

「メリル、彼はシヨーマ・ウォーズカ君。僕の友人だ」

「あ、どうも。よろしく」

どんどん話を進めてしまふレウスに戸惑いつつも、シヨーマはメリルに頭を下げる。

「……こちらこそ、よろしく」

メリルは短いながらも確かに笑みを返した。明らかに態度が違う対応だが、レウスは特に気にしていないようだった。

ざわつく教室の扉を開き、恰幅の良い初老の男性が入ってくる。

手にはいくつかの資料を持っている。彼が指導教員のようだ。

「はい静かに。……えーどうも。指導教員のボンポーラです。少々遅刻してしまいましたが、数分程度。まあ気にせずいきましよう」

1秒でも多く教練に励めと言われた覚えがあつたが、シヨーマは気にしないでおいた。

「えー早速。諸君らの今後ですが。えー学生諸君はまず目標とする『クラス』を決めてもらいまして、それを目指して、各授業を選択して参加し能力を身に付けていき、最後には是非とも立派な騎士に

なつて頂きます」

『クラス』というのは騎士達に与えられる戦闘スタイルに基づいた称号だ。それくらいはシヨーマも事前に勉強している。

「えーまず、授業には実技講習と筆記講習があり、実技は選択式ですが、筆記は必修ですので、サボったり遅刻など無いよう。こちらでは騎士としての心構えや教養、戦闘行動に際しての戦術や戦略など『クラス』に依らない内容を学びます。

えーそれで肝心なのは実技講習についてです。武術系4科目、魔法系4科目の計8科目から自由に選択して、戦闘訓練を受けてもらいます。

武術系4科目の内訳は『剣術』、『槍術』、『拳術』、『弓術』。魔法系4科目の内訳は『黒魔法』、『白魔法』、『竜操術』、『薬師術』となります。えー内容はだいたい説明するまでも無いでしょうが……」

説明するまでも無いと言われても困る人物は1人いた。

「なあ、武術系4つと白黒魔法はわかるけど竜操術と薬師術って？」
シヨーマは小声で隣席のレウスに尋ねる。

武術系は剣、槍、拳、弓。それらを扱う武術を学ぶ、というのはすぐわかる。白魔法と黒魔法もわかる。それを容易く修得してしまったから彼はここにいるのだから。

しかし竜操術と薬師術は、知らないか覚えていない。字面通りの意味で良いのだろうか。竜を操る？

「竜操術は端的に言えば特殊な魔法技術だね。基本は同じだけど竜族の力を借りてさらに高位の魔法が使えるんだけど、結構難しくてあまり使う人もいないから、僕も詳しくはわからないよ。メリルが詳しいから後で聞いてみると良い」

前の席に座るメリルに目を向ける。彼女はそ知らぬ振りでじつとボンボーン教員の話に耳を傾けている。

(難しい高位魔法ね……。結構すごい子だったのか)

「薬師術は薬草の調合を行う『クラス』だけど普通の薬剤師とは違

い、魔法の力を織り混ぜるんだ。普通の魔法と違って薬の力にも頼るから準備に手間がかかるけど、そのぶん利便性に優れる技術だね。魔法の心得はあるけど、それだけで戦うには心許ない人向けかな」
「なるほど。ありがとう」

ボンボーン教員の話に意識を戻す。

「えーどれか1科目を全て修めることで卒業が可能となりますが、実際騎士の称号を得ようとするならば、えー1科目だけでは難しいところですので、別にもう1科目の半分だけでも修める事を薦めます。理想は2科目ですが、……えー少々覚悟がいると思われませぬ。それ以上は体を壊しかねないのでお薦めはしません。若者は無鉄砲が取り柄と言いますが、無理はしないよう」

3科目は相当きつい、と。2科目でもちよつと大変だそうだが、自分の能力を活かせば白魔法と黒魔法での2科目なら比較的簡単かもしれない。それで満足しておこう。そもそも騎士になり来ただけでは無いのだし。

とシヨーマが思っていると、学生達の中から1人が声をあげた。

「先生！ しかしいずれ將軍クラスまで目指すのであれば、3科目以上は目指すべきだと思えますが！」

濃い色の肌をした、気の強そうな男子生徒だった。挑むような目付きでボンボーン教員を睨み付けている。

「……無理はしないようにと言いました。志を高く持つのは良いですが、ここでの教練だけが君の騎士としての全てになるわけでは無いのですよ」

「それでも早いに越した事は無いでしょう！」

……これは食い下がらない。そう素早く判断したのかボンボーン教員の方が先に折れた。

「出来ると思うのなら、精々頑張りなさい。」

……えー、それでは。授業の選択は自由ですがおおよその参加人数は把握しておく必要があるのです、こちらの用紙に名前と希望科目を書いて本日中に提出してください。期限は短いですが戦場でのん

びり悩んでいる暇は無いとでも思って、さくつと決めてください。
えーそれでは本日は解散とします……。この後は興味のある科目の
様子を見学する時間に当ててください」

ボンボーラ教員が退室すると、教室はまたにわかにはざわつき始め
た。

「さっきの彼、すごい剣幕だったな」

「うん？ ああ、そうだね。まあそういう人もいるよ。將軍クラス
ともなれば地位も名誉も得られる富も相当なものだからね」

「地位に名誉ね……」

「それよりシヨーマ、君はどの科目を受けるんだい？ やはり白魔
法と黒魔法かな」

何か話をそらされた気がするが……気のせいだろうと判断した。

「ああ。ひとまずはね。レウスは？」

「僕はその2つと剣術かな」

レウスはしれつと3つの科目を挙げた。

「……大変なんだろう？ あ、まさか」

「気にしないで良いよ。ちゃんと入学する前からその3つを選ぶつ
もりだったからね。」

……名門ブロウブ家の一員である以上、末の弟とはいえそれは当
然のように望まれることだし、成し遂げる覚悟もあるよ」

それは先程の男子生徒とはまた違う強い意思を感じさせる物言い
だった。

「……かっこいいなあお前」

「そうかい？ 照れるな」

そう言っレウスは本当に照れ臭そうに笑った。

正直な男である。

「あ、メリルはどうするんだい？ 竜操術以外にも受けるの？」

照れ隠しか、レウスは前の席にいるメリルにも話を振った。

「……………はあ」

「どうしたのさ」

「私も黒、受けるのよ」

ため息をつきながらメリルは答えた。

「へえ。それじゃあ3人一緒だね」

「そーね」

嬉しそうにレウスと、そして対称的にダウンナーなメリルであった。ひよっとしてこれが定番の調子になるのだろうか。そんなことをシヨーマは思った。

始まりの1日 (2)

レウス・ブロウブは騎士の名門、ブロウブ家の三男として生を受けた。騎士と、騎士を志す者からは、その名だけで期待と信頼と羨望が集まることを宿命付けられたレウスは、しかし真っ直ぐな心を持ちながら育ち、他者の助けとなれるよう自らを鍛えることを惜しまなかった。

そんな彼はやがて、人魔戦争においてその名を広く知られることとなる。

ショーマ、レウス、メリルの3人は揃って8つの科目を順番に見学して回ることにした。

自分の受ける予定の無い科目も見ておいた方が良く、というのはレウスの談である。

ざっと見てきたところ、武術系4科目は体力向上のための基礎鍛練や、各武具を用いた技能訓練など、傍目にも分かりやすいものだったので軽く済ませて終えた。

現在は白魔法科の行われる教室に向かっているところである。

「あ、そうだメリルさん」

「なに？」

「突然こんなこと言うのもなんだけど、俺、実は記憶喪失なんだ」

「本当に突然ね」

「悪いね。そのせいで……その、非常識なことをしたり、時々変なことを言うかもしれないけど、そういうこと承知しておいてほしい」
「さらっと言ってはみたが、ショーマとしては、実は少々勇気のいる告白だった。」

「まあ、色々込み入った事情がありそうなのは察していたけど……」

メリルの視線はシヨーマの黒い髪に向かっていた。この国では見
ないであろうそれは、彼女にとつても気になるところであった。馴
染みの無い風貌に聞き覚えの無い家名。レウスが目をかけていたの
にもただのお人好しでは無いと察してはいた。

「記憶喪失ね……。どんなことが思い出せないの？」

「名前は思い出せたけど、1ヶ月ほど前、リウルの村で目が覚めた
時より以前の記憶がさっぱりとね」

「さっぱり？」

「うん。どこで誰とどんな暮らしをしていたのか。全然だめだ」

「それはまた……。重症ね」

「あとはまあ、日常生活はわりと問題無いんだけど、魔法とかは…

…

「そう……」

「これから魔法科の見学だけど、変なことしたり、言ったりするか
もしれないけど、驚かないでくれよ」

「うん。それは良いけど……。ていうか記憶喪失のまま騎士志望な
の？ 貴方」

「ああ、いやそれはそれでまた色々あって」

「もう着いちゃったよ、シヨーマ」

結局話の終わらない内に白魔法科の教室に到着してしまった。

「ああ、えっと続きは、後で」

我ながら簡単に説明できない事情を抱えているものと、シヨーマは改めてそう実感した。

白魔法科の教室に入ると、担当教員と思われる女性から声をかけ
られた。

「あら、貴方、ひよっとして例の……？」

女性教員はシヨーマの黒髪を見て判断したらしい。学校へは彼の

能力はすでに連絡が行っているのだ。

「はい。彼がショーマ・ウォーズ力です。もう話は聞いて頂けていますか」

「ええ、はい……、あ、では貴方がプロウブ家の？」

「はい。レウスです。よろしくお願ひします」

「わかりました。あ、私白魔法科教員のエルメーラと言います。…皆さんもう他の魔法科には行きましたか？」

「いえ、3人ともここが最初です」

てきばきとエルメーラ教員との会話を進めるレウス。その後ろではメリルが何やら言いたげな視線をショーマへと向けていた。

特別な事情……一般生徒には特に縁の無さそうな。そういうものを先程の会話から推測させられただろう。

「ではこちらに。魔法科ではまず最初に魔導力の測定を行いますので……」

「……………」

ショーマとメリルは無言のままエルメーラ教員の後へ続いた。

3人の前に置かれたのは無色透明な水晶玉だった。

「この水晶に手を置くと、魔導力の属性と強さが現れます。あんまりに反応が微弱だと、魔法科を受けるのはお薦めできないかなってなっちゃんですけどね」

エルメーラ教員が説明する。ショーマには魔導力という言葉に覚えが無かったが、字面から予想くらいはついた。

「まあそんな心配は滅多に無いでしょうけど。……どなたからやりますか？」

「じゃあ僕から」

特に相談もなくレウスが一番手を宣言し、水晶に手を乗せた。

すると、無色透明なはずの水晶の中に、どこからともなく黄緑色の煙のようなものが漂い始めた。煙は水晶の中をふわふわと漂って

いる。

これが魔導力の属性と強さというやつであるうか。シヨーマにはこれがどういう結果なのかも、どういう仕組みでこうなるのかもさっぱりわからなかった。

「はい、もう良いですよー。次の方は？」

エルメーラ教員は結果をメモしながら次の人物を催促した。

「シヨーマ、やってみなよ」

「え、俺？」

「手を置くだけだよ。難しいことは無いだろ？」

「あ、ああ……」

レウスが水晶から手を離すと、黄緑色の煙も消えた。それを見てシヨーマもそつと水晶に手を乗せる。

現れたのは黒い煙だった。

「うわ」

特に何か力を込めたわけでもなく、本当に手を置いただけで煙が現れた。

しかしどこかおどろおどろしさを感じる真っ黒な煙には、少し背筋が寒くなる。

「おお」

「あ、すごいですねえ。全属性ですか」

レウスと女性教員は揃って感心しているようだった。

「全属性？」

「あ、勢いもすごいですねえ」

「え」

黒い煙はレウスの黄緑色の煙と違い、強めの勢いで水晶の中をぐるぐると漂っている。

何が何やらわからないでいると、レウスが解説を始めた。

「これは色が属性、煙の漂う勢いが強さを表しているんだ。全ての色が混ざっている黒はつまり全ての属性を表す。勢いも強いし魔導力の強さも相当な物のようだね」

「要するに……?」

「君にはすごい魔法の素質があるってことさ」

今更と言えば今更な事実ではあった。

瞬時に魔法を修得する能力。それはもちろん覚えた魔法を行使出来るということでもある。実際に強大な魔法を放ってしまったこともある。

……これが魔法の素質がある、と言わなければ何だと言うのか。

だから別段驚くことではない。シヨーマ自身と、その事情を知る者にとっては。

「ふーん……………」

そうで無い者が1人。メリルだった。

「ずいぶんとまあ……すごいものを持つてるのね」

その言葉を驚きと苛立ちの混ざったような物言いだと、シヨーマは感じた。

「ああ、まあ、ね……。自分でも何でこんなことになってるかわからないし。それと……………」

「まだ何かあるの?」

「さっきの話の続きでもあるんだけど……………」

「にわかには信じがたいわね……………」

シヨーマは自分の持つ『瞬間修得能力』のことについて、改めて話した。その能力ゆえ、この士官学校への推薦状が得られたことまで。

「学校側でも、彼に関しては色々と配慮するように言われているんです」

エルメーラ教員が補足した。

「魔法を教える分には楽で良いんじゃないか。なんて冗談めかして
る先生もいるんですけどね。フフ」

エルメーラ教員は呑気そうに笑った。

「……でも、良い印象を持たない人もいるんじゃないかしら。特に
同じ学生なんかは」

しかしメリルはそれほど楽観的では無かった。

「ああ……」

言われてみれば、そういうことは、確かにあるかもしれない。自
分のことばかりで手一杯だったシヨーマは、そういう考えには至っ
ていなかった。

「記憶喪失はともかく、この事はあまりおおっぴらにしないほうが
良いかもね」

「……そんなに隠し通せるものでも無さそうだけど」

「その時はまあ、その時だよ」

「あ、私もそう思いますよ。学校外の人にも、あまり言いふらさな
い方が良いと思います」

「……そう、ですね」

シヨーマが初めて魔法を修得してしまったとき、それがどうい
う物だったのかもわからずに、その魔法、『サンダーストーム』を不
意に発動してしまったことがあった。

オードランの育てている畑の半分ほどを吹き飛ばしてしまい、随
分と迷惑をかけてしまった。彼は笑って許してくれたが、シヨーマ
は自分が恐ろしくなった。もしこれが人の多い場所であつたら……。
そんな折、ちゃんとした学習のできる士官学校への推薦は、不安
もあつたが安堵もあつた。希望があつた。

けれど今、それを疎ましく思う者もいるかもしれない。というこ
とに気付いた。……それは少し、悲しいことに思えた。

「まあ、良いわ。そろそろ私と変わってもらえる？」

「え？」

ぼんやりしていたシヨーマは、メリルが何の事を言っているのか、一瞬わからなかった。

「水晶」

「あ、そっか。ごめん」

ずっと水晶に手を乗せたまま話を続けていたことにも気づいていなかったようだ。

「まったく」

シヨーマが手を離すと、すぐにもメリルは水晶に手を乗せた。さつさと済ませようとばかりに。

メリルの手は細くしなやかで、丁寧に磨かれた爪などさりげないところからも気品のようなものが感じられた。

(綺麗な指だな)

彼女の魔導反応は綺麗な紫色の煙で、勢いはシヨーマのそれより少しゆっくりめ。といった所だった。それでも結構な勢いがあるようだ。

「赤と青の綺麗な2属性ですね。強さもかなりある」

「彼に比べたらどうってこと無いですよ」

「いやいや、新人生でこれは相当すごいですよ」

エルメーラ教員は素直に感嘆しているようだった。

「彼女はドラニクス家の生まれなんです」

「ああ、そうだったんですか。いやさすがです」

メリルは横からのレウスの評価に澄まし顔であったが、よく見ると笑みを押さえようとしているようにも見える。

「はい、それではこちらが結果の控えです。別の魔法科目を見に行くときはこれを見せてくださいね。もう1回検査しなくても済みますので」

「ありがとうございます」

3人は先程の結果が書かれた紙を受け取ると、次は教室の様子を見学し始めた。

「この教室では魔法の術式や実戦における使用ノウハウなんかを学ばんです。実際に発動する訓練は別の場所で行われる事が多いですね」

教室といってもボンボラ教員の話聞いたあの教室とは趣が異なり、特に目立つのは大量の本と本棚である。

「あ、その辺にあるのは魔法の教本ですから……ウォーズカ君は読んだだけで覚えちゃうんですね……。あんまり迂闊には開かない方が良いでしょう……」

「あ、そ、そうですね。気を付けます……」

「ちゃんとした授業は明日からです。今日はこの辺で」

「ありがとうございます」

見学を済ませ、教室から退室しようとする。

「あ、シヨーマ、彼だよ」

レウスがさきほどの水晶玉で魔導力の測定をしている生徒に気が付いた。

「ああ……」

ボンボラ教員に噛みついていた濃い肌の色をした男子生徒だった。何やら渋い顔をしている。

「おーい」

レウスはさっそく近づいて声をかける。

「……はあ」

またか、とため息をつきながらメリルは彼の様子を目だけで追う。「君もこれから魔法科の見学かい？ 良かったら一緒にどうかな。同じ教室に集まったよしみで」

レウスは気さくに話しかけている。シヨーマとメリルはそれを少

し離れた場所から見ているだけだ。

「いつも……あんな調子なの？」

「……そうみたいね」

「僕はレウス・ブロウブ。君は？」

「ブロウブ……？」

男子生徒はその名に思うところがあるのか、少し考えた後、

「デュラン、だ」

家名までは名乗らなかった。

しかしレウスは気にすることなく笑顔で手を差し出した。

「デュランか。よろしく！」

デュランは水晶に乗せていた手を下ろし、ゆっくりと握手をかわした。

「白魔法ってことは、君はやはり……『聖騎士』を？」

「ふん……。見たらどう？ 今の反応。微かに真つ白な煙が見えただけ。魔法の才能はからつきしってことさ。そんなんで『聖騎士』なんて……」

「鍛えれば伸びるものだよ。そう簡単に諦めない方が良くと思うな」

「どうだか……」

デュランは寂しそうに笑うと、そつとレウスの手を離れた。

「俺は一人で回るよ」

「そうかい？ ……お互い頑張ろうね。それじゃ」

「ああ」

デュランと別れたレウスが、ショーマとメリルのもとに戻ってくる。

「駄目だったか」

「うん。……でも想像してたより良い人そうだったよ」

「ふっん」

レウスは彼を気に入ったようだった。少し話ただけだろうに、

そうわかるものなのだろうか。シヨーマにはイマイチ疑問だった。

「まあいいわ。早く次、行きましようよ」

こうしてちょっととした出会いを経て、3人は次の教室へ向かうのだった。

始まりの1日 (3)

メリル・ドラニクス。『竜操術』と名付けられた新しい魔法の体系の開祖、ドラニクス家の長女である。

騎士としての有名を馳せ続けるプロウブ家とはまた別方向の名家で、戦場での活躍に加え、魔法の研究者としても一家言を持ちその資産を伸ばした。

そんな安定した一族と優秀な兄達の庇護のもと、これでもかと甘やかされて育った彼女だが、持ち前の意思の強さで自ら騎士の士官学校への入学を志願したのだった。

「竜操術とは竜と心を交わし力を借り受けることで、既存の魔法を凌駕する新たな高位魔法技術。ご存じですね？」

「ええ、もちろん」

「そのためにはまず心を通じあわすことの出来る『竜』を見付けることが必要です。例えば術そのものを修得したところで竜がいなければ、何の意味もありません」

「私には既に10年を共にする『友』がおります。それについても問題はありませぬ」

「よろしい。」

……この調子ではもう教えることなんて全然無さそうだね」

「そんなこと言われても困るんですけど」

ここは竜操術科目の教室。そして今のが担当教員アウディと注目の新入生メリルのやりとりである。

すでに入学前から、独自に竜操術への修練に励んでいたメリルにとっては、ここで行われる授業で得られる物など正直なところ、少

ないのだ。

「まあ、こちらに注力する必要が無いのなら、同時に別の科目を受けてみるのも良いと思いますよ」

「ええ、最初からそのつもりです」

アウデイ 教員の薦めに凜と答えるメリル。

「やはり……、騎士を目指されるので？ 竜操術以外にも得手があるとなれば、まさに引く手数多でしょう」

「そこまでは考えていませんが、ドラニクスの名に恥じない人間でありたいとは考えています」

「ご立派です」

竜操術科目を後にしたシヨーマ達は、続いて黒魔法科目の教室に向かっていた。

「教員の方がぺこぺこ頭下げて来るなんて、やっぱりすごいんだな」
シヨーマはメリルの見えざる実力の片鱗を感じ、素直に感心するばかりであった。

「……貴方ほどじゃないわよ、きつとね」

「俺のとは事情が違うよ」

シヨーマの能力は、彼自身が修練の末勝ち得た物ではない。少なくとも記憶の無い今のシヨーマの物では。

メリルの『今』は、恵まれた環境があったのは確かだろうが、勝ち得たのは彼女自身の努力の結果に違いのないのだから。力はあるけど、過去の無いシヨーマにはそれが羨ましくも思える。

「本当に、すごいな。って思うよ」

「……………ふん」

誉められると、メリルは怒っているような、照れ臭そうな、複雑な顔をしてそっぽを向いてしまった。

黒魔法科目は、今まで回った科目に比べかなり多くの人が集まっていた。

「盛況だな」

「人気あるからね、黒魔法は。戦場で多くの戦果を上げやすいし、後衛だと危険が少ないって考える人も多いらしい」

「なるほどねー」

「最初は混みそうだったから後に回したけど……。どっちにしろ窮屈な思いをしそうだね」

ふとメリルの様子を伺うとなにやら仏頂面になっていた。

「嫌だな……」

「メリルさんは……人混み苦手なのか」

「うん……」

さつきまでは誉められて上機嫌だったようだが、今はダウンナーな雰囲気だ。

「しょうがないよ。我慢しよう」

「はあ……」

レウスは笑いながら彼女の肩を叩いて言った。

なんとか教室に入ると、教員の案内で空いている座席につくよう指示がされた。込み合っているため3人並ぶことのできる席は無く、シヨーマはレウスとメリルからは離れた席に着かされてしまった。

（まあここにいる間だけだし我慢するか……）

せめて目立たないようにしようと思ったが、しかしそうもいかないうようだった。

「ねえねえねえ、あなた、噂になってる彼よね」

隣の席にいた女子生徒から声をかけられてしまったためだ。

「何の、ことかな……」

「またまた〜。プロウブ家とドラニクス家の人間を侍らせてる異国人がいる、ってすっかり話題だよ〜?」

「ためにシラを切ってみようかと思っただが無駄だったようである。実はどこかの王子様? なんて言われてるけど……実際の所、どうなの?」

興味津々で仕方が無いようだ。観念して彼女の方を向く。

女子生徒は先程の口調から想像した通り、快活そうな表情と瞳をしており、胸元まで伸ばした赤みの強い茶髪と、その髪が乗るほど自己主張の激しい胸が目を引く。

(どこ見てるんだ俺は……)

総合的には、メリルとはまた違った印象の美少女と言えた。

「う、うん。実はちよっと、記憶が、無くてね……。彼らには良くしてもらってはいるけど、王子とかでは無いし、侍らせてるとかも、無くてね。うん」

変な事を意識してしまい、しどろもどろになってしまふ。

「記憶、喪失……? なんだか思いの外やんごとない事情だったのね……」

ぶしつけな物言いだったことを彼女は恥じているようだった。

「そんな、深刻にならなくても良いよ」

「そう? ごめんなさいね」

謝られると逆に申し訳無くなってくる。

しかし彼女はすぐに立ち直ると、

「あ、私、セリア。よろしくね!」

また明るい笑顔で自己紹介と共に右手を差し出した。

「ああ。シヨーマ・ウォーズカです。こちらこそよろしく」

シヨーマも右手を差し出し握手をかわした。見た目の快活さとは裏腹に繊細で儂げな指先のように感じられた。

シヨーマとは離れた席になってしまったレウスは彼の心配をしていた。隣の席についているメリルはその様子にまたため息をつく。

「いちいち気にしすぎでしょ……」

「そうかも知れないけどさ」

メリルにもその気持ちはわからないでもないのだ。しかし今日は入学初日であり、この教室は人の目も多い。

「確かにあの能力に目をつける誰かがいないとも限らないけど。今はまだ大丈夫でしょう」

シヨーマ本人がこの場にいないのを良いことに、メリルは気になつていたことを確認しようとする。もちろん声は潜めて。

……教本さえあればいかなる魔法も修得できるというならば、目をつける輩も遠からず出てくるだろう。その上で記憶喪失であるというなら、何かと御しやすいことだろう。あること無いこと吹聴すれば、信じる根っこを持たない人間は簡単に騙せるものだ。

つまるところ、誘拐してくれと言わんばかりの存在なのだ。シヨーマ・ウォーズカは。

特に戦争が終わつてまだ3年。敗戦したイギリス国軍の残党が良からぬことを考えている可能性は高い。

だが、それを見越した上でのブrouブ家だろう。彼らが背後に付き、見習いとはいえ直系の血を引くレウス自身が護衛に付くとあれば賊もそう易々とは手を出せまい。

「……彼、本当のところ何者なの？」

「まだ何もわからないよ。……ただ彼の保護を兄さんに頼んだのは、かのオードラン伯だ」

「……………ええ？」

あらゆる意味で思いもかけなかった名前に、メリルは眉を寄せる。「彼の正体は我々の想像以上に大きな物をもたらすかもしれない、つて……グローリア兄さんは言っていた」

「貴方の大お兄様が？」

「うん。オードラン伯に会いに行ったのはブレアス兄さんだけど、伯からの話をブレアス兄さんに伝えられて、そう思ったそつだ」

「そつなんだ……。あの人が言うなら本当なのかもね……」

2人の、含むところの多い会話はそこで終わりとなった。

「はー……人多いな……」

後は独り言のみとなった。

黒魔法科目担当の教員、インギスが教壇に立った。

「あ、シヨーマくん、あれがインギス先生だよ。現役の黒魔法導師の8割はあの人の指導を受けたんだって。すごいねー」

「へえ……」

あの後延々喋り続けるセリアの勢いに辟易しつつあったシヨーマは、教員の登場でやっと黙ってもらえそうだと安堵した。

「本年も積極的な志望者が多くて結構です。しかし」

恰幅の良い体格をしたインギス教員は一旦言葉を区切り、息を吸い直した。

「1ヶ月もすれば半分も残らないでしょう。そして、1年で学科を全て修了出来るのは10人もいないでしょう。私はそれが実に悲しい。……君達には期待しています。どうか私を悲しませないで欲しい」

(脅しかい……)

「黒魔法とは『破壊』の力です。ただ壊すだけです。黒魔法とはそれしかできない。

……今この国は戦争の『破壊』から立ち直ろうとしている。君達も辛い想いをしたことがあるでしょう。しかし君達は、その力をこれから学ぼうとしています。どういふことかわかるでしょうか」

(残念ながらあんまりわかって無いやつもいます……)

「力の使い方を知る者は、自然と力の抑え方も知るので。君達ならきつとわかってくれると信じています。」

……それでは、明日からの授業でまた会いましょう」

「記憶喪失の人間には色々刺さる物のある演説だったね……」

インギス教員の話聞き、シヨーマの笑みは少しひきつっていた。

「あ、そっか……。シヨーマくん、戦争の記憶も無いんだ……」

セリアは同情的な視線を向ける。

「でも嫌なことも忘れてるってのは……ちょっと羨ましいかも」

「……君にも、何か嫌な思い出が？」

セリアの明るさからは、とてもそういった物は感じられなかったシヨーマはなんだか意外に思う。

「お父さんが戦場でね……。命こそは拾ったけど、脚をやられちゃったの」

「そうなんだ……」

「少し移動するだけでも一苦労だね。……もし私が一緒に戦えてたら、きつとお父さんを守ったのにな。無茶苦茶な話だけど、やっぱり気持ちを抑えきれなくてさ」

「その気持ちひとつでここまで来たんだろ？ ならすごいことじゃないか」

「へへ、そうかな。当のお父さんには反対されただけだね」

「はは……」

彼女と話しているうちに、教室から人は退出し始めていた。

その人の流れを遡って、レウスがシヨーマのもとへやってきた。

「おーい、シヨーマ。早く出よう。人が多いから入れ替わりで次の

見学希望者が入るみたいだ」

「ああ、そうなんだ」

「あ、あ、あじゃあ私はこれでっ!」

「え、ああ、どっか行く場所でもあるのか?」

そそくさと席を立つセリア。

「うん、まあ、ね。それじゃっ」

レウスはまた一緒に行かないかと誘ってきそうだし、そうなる前に素直に見送ることにした。

「ああ、それじゃあ」

去っていくセリアを二人で見送りながら、レウスが尋ねる。

「……今の子は?」

「ああ、ちよつと仲良くなったんだ」

「へえ……。可愛い子を捕まえるもんだね」

「そういうのじゃ無いって……」

こういう冗談も言うんだな、とシヨーマは素直にレウスの人物像に1つ要素を追加した。

最後に薬師術科目を軽く見学し、志望科目書を提出すると、今日はおもつやる事が無くなった。

3人は揃って、朝、シヨーマとレウスが出会った門の前で別れの言葉を交わす。

「今日はありがとう。君達に出会えて本当に良かったよ。1人じゃ色々不安も多かっただろうし」

「ああ、こちらこそ。……何なら寮まで付き合おうか?」

「そこまではいいよ……。そういえば、レウスはこの寮なんだ?」

「僕は寮じゃ無いんだ」

「そうなのか?」

リョール士官学校の入学生は、基本的に全て寮生活だったはずだ。

「ああ。ブラウプ家の別宅があるんだ。この街にいる間はそこに住むことになってるんだ」

「別宅って……」

「私もね。……一部の名家は寮生活しなくても良いことになってるの」

レウスの説明にメリルが補足をした。

「……やっぱお金の力？」

「そういうのもまあ、無い訳じゃないけど。それなりの地位を持つならそれなりの場所で『保護』される必要があるってことよ」

「僕個人としては寮生活でも良いんだけど、周りが認めてくれないつてのもあるね」

「ふうん……」

どうやら名家にも色々と面倒な事情があるようだった。シヨーマはあまり深くは気にしないでおくことにした。

「まあいいや。それじゃあ、また明日」

時はすでに夕陽が差し出す頃であった。

「ああ、また明日」

「ごきげんよう」

そしてシヨーマは2人に背を向けて歩きだした。

「……………良いの？」

「彼の寮はカターマさんのところだからね」

「ああ……ちゃんと対策済みってわけ」

学生寮といっても1つの建物ではなく、いくつかに別れており、学生達はそれぞれ振り分けられて寮生活を行っている。

レウスの言う『カターマさんのところ』というのもその1つで、リヨール市内に別宅を持たない一部の名家が暮らす、比較的豪華で警備も厳重な寮のひとつだ。学校の敷地に隣接しており、校門から

寮まで警備兵が常に配置されている徹底ぶりだ。

「お疲れ様です」

「ああ、お帰り」

警備兵にもいちいち挨拶をしながらシヨーマは寮へ向かう。

ホテルのような佇まいのこの『一号宿舎』は名家出身の学生が多いが、あくまで学生のための寮であり、『自分のことは自分で』がモットーである。メイドなどいるわけないし、食事も自分で用意する必要がある。

寮生はまずロビーで番をしている女性、リノンから部屋の鍵を受け取る。外出の際は鍵を預けるのもここのルールだ。

「ただいま戻りました」

「あ、お帰りなさい。シヨーマさん。すぐに鍵用意しますね」

リノン・カタマ。寮の総管理者の一人娘である。肩口で切り揃えられたショートカットの茶髪をした、落ち着いた物腰の女性である。今年20になったばかりだが、見た目のわりに大人びているし、最近美人に磨きがかかってきたと、毎日彼女と顔を会わせる警備兵達も話題にしているらしい。

「メイドはいないがリノンさんがいる」

何の話をしているんだか。

「あ、名前……、もう覚えてくれたんですか」

「ふふ。大事な寮生さんですから。特にシヨーマさんは印象的な方です」

「はは……」

つい髪を押さえてしまう。美人に名前を覚えてもらえるのは気恥ずかしさもあるが、悪くない気分だ。

「……見た目だけじゃないですよ。なんだか、独特の雰囲気を感じます。……はい、どうぞ」

鍵をそっと手渡される。わずかに触れた指に、少しどきどきして

しまっ。

(指くらいでなんだよ……)

「そ、それじゃあ」

「はい」

独特の雰囲気……いまいち実感は無かったがそういうことを言われると鼻がむずがゆくなるのだった。

広すぎず狭すぎずの部屋には、しっかりとしたベッドに机にランプと、この街に来る際持ってきた手荷物の入った鞆があるくらいだった。

名家のための寮にしては質素が過ぎるかもしれないが、シヨーマにはいちいちそんなことを感じる記憶は無かった。

トイレは各フロアで共有とはいえ、個別の風呂場とキッチンがあるのは贅沢な方だろう。

とりあえずは上着を脱いでベッドに横になる。思った以上に疲れがあったようだ。すぐに眠くなってしまう。

(いかん……これは寝る……)

ゆるゆると立ち上がると、部屋に起きっぱなしにしておいた鞆に手を伸ばす。

記憶を失ったシヨーマが、その時持っていた持ち物の全てだった。彼の身柄に関わるかもしれない物だ。とはいえ、大した物は入っていない。

財布……。いくらかの硬貨や紙幣が入っていたが、このブランジア王国の物ではないし、もちろん近隣国の物でも無い。そしてブランジアのお金は全く入っていない。シヨーマが別の国の出身という証ともいえる。

水筒……。この国では見ない透明な薄い素材で作られた物だった。ガラス製ではない。蓋もネジのように回転させて開閉する仕組みであり、この国ではこのような構造の水筒は使われていない。

中の水は紅茶のようである。半分ほど残っているが、成分を解析すれば何かわかるかもしれないと、オードロン老人に言われたので残したままだ。腐らないと良いけど。

耳当て……。のような物。今一つ用途がわからない物だ。左右をつなぐバンドからさらに別の糸が垂れているが、どこかに結ぶのだろうか。

鞆の中の物では無いが、今身に付けている眼鏡。それ自体はあまり珍しく無い物だが、レンズの度に対する薄さや軽さなどの精度がかなり高いらしく、高級品であることが予想される。

今着ている服も、この街で買いそろえた物だが、目を覚ました時に着ていた服はやはり見ない素材であったという。

……。それから最後に、手のひらに収まるサイズの黒くて四角い板、というか、薄い箱。

あちこちに突起があったり、文字のようなものが書かれているが、記憶に無いためこれが何を意味するかわからない。

何か重要な物だったような気がするのだが、どうにも思い出せない。自分はこれを大切にしていたような気がするのだが。

恐らくショーマの正体を教えてくれる物だという予感があった。
……。何なんだろう、これは。

結局分かることは、相当遠くの、知っている人がほとんどいないような国から、たった1人でやって来たのかも知れない、ということ。そんなこと、有り得るのだろうか。

結局今日も何かを思い出すことは無く、そのまま遅い来る睡魔に身を委ねてしまった。

……明日からは本格的に騎士としての修練が始まる。

……今日出会えた人達。レウス、メリル、セリア。教員の先生達。それから、直接会話はしなかった、デュラン。

……彼らとは仲良くやれるだろうか。

……少しずつ、ショーマの新しい生活は動き出していた。

目指すべき道 (1)

リヨール士官学校の授業が始まりかれこれ3日目。

黒魔法科では待望の、実際に魔法を発動する実践訓練が行われる事となった。2日目までに初級魔法『アイストーン』と『ファイアボール』の修得が完了した生徒が参加を許されている。

この時点でそれが叶っている学生はまだ少ない。初級魔法とはいえ2、3日程度で修得はできる物では無いのだ。今この訓練に参加しているのは、独自に魔法の教習を受けられるつてを持っており、入学前から魔法に触れていたか、よほど魔法の才能があるか、どちらかだった。

シヨーマ、レウス、メリルの3人もそうだった。入学の日に出会ったセリアは、いまだ教室で教本と睨み合っているところだろう。

そもそもまず『魔法』とは、程度の差はあれど誰もがその身に持っている『魔導エネルギー』と、空气中に漂う『マナエネルギー』を掛け合わせて産み出す『魔力』で『術式』を組み上げることによる発動する。

発動させたい魔法に必要な魔力を練り上げる工程と、すでに定められている術式を正しく組み上げる工程の2つが必要というわけだ。これらは論理的かつ正確に行えば失敗することは無い。教本にあわせて丁寧にやれば良いだけのことだ。

シヨーマの『能力』とは、魔法教本に書かれている『魔力』と『術式』の内容を瞬時に理解し記憶することと、その2工程をまるで機械仕掛けのように正確に実演させることだ。と推測されていた。

特にこの『瞬時に理解する』という点がこの能力の特異点である。

魔法教本とは、ただ紙にインクで文字を書き記しただけの本では無い。記された文字はインクの成分に織り混ぜられた魔力によって、読者の正しい認識を妨害しようとするのだ。だから魔法の心得が無い人間には読むことは出来ても『理解』することが出来ない。

この仕掛けは元々、まだ技術としての魔法が体系化されきっていなかったころ、魔導師達が自分達の研究成果を外部に漏らさないため、錠前のような意味合いで仕込んだものだと言われている。

魔法の存在が一般化したこの時代においては、そういった意味合いは薄れていったが、それゆえ多くの人が触れやすくなったため、安易に危険な力を持たせないよう、この仕掛けは未だ残り続けている。

学生にとっても苦勞の果てに得られる達成感として、良いか悪いかはさておき、受け入れられていた。

つまりシヨーマの能力とは、魔法を学ぶ上で最も手間がかかり、最も重要な過程を飛ばしてしまうということなのだ。

魔導師はえてしてプライドが高いと言われるが、それは初級魔法であろうと常に苦勞があり、それを乗り越え続けたからこそ、自身のこれまでに高いプライドを抱くためだ。

だからこそ魔導師としてのシヨーマ・ウォーズカは、その能力以外の面でも『異端』と呼ばれるようになるのだが。

「それでは、始めてください」

「はい！」

シヨーマは黒魔法科の実践指導を担当するポリー教員の言葉に頷いた。

……意識を集中し、体の中の魔導エネルギーを呼び起こす。そし

て空気中に感じるマナエネルギーと混ぜ合わせていく。練り上がった魔力は、手にした修行用ワンドの先に込めていく。その作業に淀みは無い。

そのままワンドを振り、虚空に向かい魔法の言葉で文字列を書き込む。術式である。

そして術式に魔力を込めると、その成果が浮かび上がっていく。

大気中の水分と魔力が集まり凝縮し、水の滴が出来上がった。さらに魔力を込め、その水を凝固させると、氷の礫が完成した。

「よろしい。それでは射出してください」

「……はい」

ワンドの向けた先に、氷の礫が浮かんでいる。魔法は発動されたが、行使はされていない状態だ。これを一般的に、魔法の待機状態と呼ぶ。

余談だが、このように魔法を使うのにはいちいち時間がかかる。

熟練していけば効率良く魔力の練り上げや術式の組み上げは手早くできるようになるものだが、ショーマの能力ではそのための『経験』までは補えない。

だからこそ実戦における魔法使いの戦法とは、この準備時間のラゲをどう扱うかが重要になる。

基本的には安全地帯を確保し、このように待機状態で相手の接近を待ち迎撃するというのが一般的だが、威力を削って高速発動を目指す者や、周到に罠を張り、発動までのタイムラグを考慮した上で敵を誘いだし一網打尽にするという者などもいる。

「『アイスストーン』!」

掛け声と共に魔力の噴射によって射出された氷の礫が、約10メートルほど先に置かれた的にめがけて飛んでいく。

「あ
が、命中せず。」

「まあ、魔法自体は問題無く発動できましたので良しとしましょう」「は、はい」

ポリー教員と一緒に苦笑する。魔法は確かに問題無く使えた。そこはそういう物だと、自分の未知の能力をある意味信賴していたシヨーマは特に気にしなかった。しかし命中させられるかどうか、使いこなせるかは、自身の技術次第なのだ。

これから先、覚えなくてはならないことはたくさんあることを改めて実感する。

これが初級魔法、『アイスストーン』である。

気体から固体までの水分の変化は、魔力の凝縮と似ておりイメージがしやすく、出来上がった礫を投擲しぶつけるという単純な攻撃手段は、比較的簡単に修得できるため、最も入門に適した魔法だと言われている。

ただこの魔法は威力が小さく、それこそ小型の弓矢でも撃つた方が威力としてはましなものである。実戦においては魔導師の攻撃手段としては下位の評価であり、むしろ近接職の牽制技として補助に使う者の方が多い。

バン、と木の板を撃ち抜く乾いた音が響き渡る。

メリルの放った『アイスストーン』が的を貫いた音である。

「これは、お見事」

ポリー教員は思わず手を叩く。

メリルの魔法はシヨーマのようなただどしいものではなく、補

助ワンドに頼らない指先1つでの術式の書き込み、1秒未満での高速発動、そして正確な狙いと木の板を貫く充分な射出速度が合わさった、見事と言う他無い華麗な一撃だった。

「すごいじゃないか」

「ふふ。これくらいどうってことないわよ」

シヨーマの賛辞を、メリルは美しい金髪を優雅にかきあげながら受け取った。当然のようでないながらも、どこかまんざらでは無さそうな様子である。

他の生徒からもわずかに歓声は上がっていた。だが誰よりシヨーマは先程の自分の未熟さを実感したばかりであることから、メリルの凄さは彼ら以上にその身に感じていた。

続いてレウスや他の生徒なども『アイスストーン』の実習を行った。それが済むと次は『ファイアボール』である。

炎の塊を射出する。という『アイスストーン』に似たタイプの魔法ではあるが、氷の礫という固体ではなく、魔力を燃料に発火を起こし、そのまま炎そのものを射出するという点が大きく異なる。固体では無いため練り上げや射出の難度が上となるが、対象に炎を燃え移らせる事が可能なため、攻撃力もずっと上だ。

しかしシヨーマにとっては魔力の練り上げも、術式の書き込みも、炎の射出も『アイスストーン』の時とほぼ同じ感覚で行える。初級魔法も上級魔法も彼にとってはどれも等しく正確無比に発動できるため、難易度の差に意味は無いのだ。

(さっき外したのを意識しつつ狙いを付けて……)

ワンドの先に浮かぶ炎の弾。それよりももう少し前方に意識を向ける。

「『ファイアボール』！」

掛け声と共に炎の弾を射出する。今度は見事命中する。

込めた魔力はそう多くなかったため、木製の的には火こそ燃え移らなかつたが、若干の焦げ目が残った。

「おお、今度は上手く行つたじゃないか」

様子を見ていたポリー教員は成功を祝った。

「ありがとうございます」

シヨーマは喜ぶが、良く考えればシヨーマとしては『アイスストーン』と同じ調子でやっただけであり、違いと言えば的に当たったか外れたかしか無いことを思い直す。その程度で喜ぶものでは無いだろうと。

続くメリアはさつきと同様に、見事な『ファイアボール』を披露した。

意外だったのはレウスの放った『ファイアボール』は、発動こそしたが、的に命中する前にかき消えてしまった事だった。

「レウスの属性は黄緑。炎系の魔力を練るのが苦手とされる属性なの」

「ああ、属性つてそういう物だったんだ……」

「そう。私は赤と青の2属性を併せ持った紫の属性。炎と氷は得意分野つてこと。……ちなみに貴方は、全部得意なはずよ。すごいわね」

「ど、どうも……」

参加した学生全てが2つの魔法の実習を終えると、正式に修得したことがポリー教員によって認定された。

「さて、これで君達は本当に黒魔法の道への第一歩を踏み出したと言つて良いだろう。黒魔法は扱い次第でも危険な起こしかねないものだ。正しい知識と正しい理念を持ち続けることを忘れないように。……それでは本日は解散！」

「ありがとうございます！」

今日の授業は終わり、3人はこの後はどうするか話していた。

「僕は剣術科にも行っておこうと思っただけど、どうする？」

「俺は……ちよつと黒魔法科に用事が」

「私は帰る」

3人とも意見がバラバラだった。

「はは。それじゃ今日はここで別れかな」

「そうだな。また明日」

「うん、それじゃあ！」

レウスは早足で剣術科目の訓練場へと向かっていった。

「それじゃあ、俺も」

「ええ……。……頑張つてね」

シヨーマはメリルが何か言いたげなように感じたが、自分にも用事があるのでここは深く考えず、黒魔法科の教室へ向かうことにする。

「ああ、また明日」

廊下を曲がって彼の姿が見えなくなるまで、メリルはそこでじっとしていた。

教室へ入ったシヨーマは、セリアの姿を探していた。

「おーい」

セリアの方からこちらに気付いて手を振ってくれた。彼女の隣の席に座る。

「ねえねえ、どうだったどうだった？」

昨日の授業で実践訓練を受けることが決まった時に、終わったら様子を聞かせてくれと頼まれていたのだ。

「うん、まあ……何て言うのかな。普通……？」
「何よそれー」

曖昧な表現をするショーマにセリアは口を尖らせる。

「もつところ、派手にドカーンとやったとか、無いの？」

「初級魔法を2つ試し撃ちしただけだよ……知ってるだろ？」

「そうだけど。じゃあ、こっそり秘密の魔法教えてもらったとかは？」

「無いよ」

「なんだー」

心底がっかりそうな顔をする。彼女は良く表情が変わるので話を
していて楽しい。

「セリアはどうだい？ 教本読み取れそう？」

「んー、まだ1割ぐらい。全然進まないよ……」

「まあ、ゆっくり頑張ってみようよ」

「……何かコツとか無いかなー」

「と、言われてもね……」

一瞬で理解してしまうショーマにとってはコツも何もあつたもの
では無い。他人の指導に向かないのはこの能力の欠点の1つかもし
れない。

「この調子だと初級魔法1つに1ヶ月かかっちゃうよ……」

「ま、まあ読み進めて行けば、自然にコツがつかめてペース上げら
れるかもしれないし。そこまではかからないんじゃないかな……」

「そうかな……」

「そうだよ……たぶん」

「そこは『たぶん』なんてつけないでおいてよー」

「あ、ああごめんごめん」

上目使いで若干睨むような形で怒られてしまった。声と口許は笑
っていたが。

「ふふ。そうだね。……うん。諦めないで頑張ってみるよ」

本当に悪いと思っているかのようなショーマの様子に、セリアは

無邪気な笑みをこぼすのだった。

シヨーマはその後セリアと別れ帰路に就こうとした。が、その前にふと思いつき立ち剣術科の様子を見てみようと思いついた。

そこではレウスと、例の男子生徒デュランが木製の剣で打ち合いの稽古をしていた。

「ハアッ！」

攻め立てているのはデュランの方だった。迎え撃つレウスは冷静にその攻撃をさばっている。

「まだまだッ！」

デュランは壁にかけられていた剣を取り、左手に構えた。2刀流というやつか。

連激の勢いは増したが、なおもレウスはそれをさばき続けている。「一撃ごとの重みが無くなっているよ！」

「くッ！」

その言葉に乗ってしまったデュランは、力を乗せて大きく剣を振る。だがそれは手数を活かした戦闘スタイルを殺してしまった。振りの大きい一撃は容易く回避され、返り討ちにあう。

「それで大振りになってしまっただけは意味が無いだろう」

「ぐ……ッ………あ」

脇腹に一撃をもらってしまい、苦しそうにつづくまるデュラン。その様子でレウスは表情を歪ませる。

「……一休みしないかい？」

「俺から仕掛けたんだ……そう簡単に止めるか……ッ！」
だがデュランは諦めず立ち上がるようにする。

さすがにまずいんじゃないか、と思ったシヨーマはたまらず声をかける。

「おい、レウス……」

「彼は止めない、と言っているんだよ」

レウスは既にシヨーマには気が付いていたようで、「こちらも見ずに言葉を遮った。

「いや、でもさ……」

「……………ッ！」

今度はデュランが言葉を遮った。言葉ではなく、視線で。

(こわ…………)

あの形相は聞く耳など持たない。といったところだろうか。

「……………い、いやでもさ？」

「ただの稽古だよ。お互いわかってやってるんだ」

「ああ、もう……………わかったよ……………。ほどほどにしておけよ……………」
レウスとはまだ短い付き合いだが、必要以上に痛め付けるような性格では無いと思う。見捨てるようで気が引けるが、ここはレウスの判断に任せて、シヨーマはこの場を後にする。

帰りの道を行きながら、デュランはなぜあんなにも必死になっているのか、それを気にしていた。2人はつい先日出会ったばかりなのに。その数日でデュランはレウスにああも食い下がるような事情ができたということなのだろうか。

寮に戻ったシヨーマを、今日もリノンが優しい笑顔で出迎えた。

まだほんの数日のことなのに、なんだかこの笑顔が当たり前のよう
に感じられる。リノンはそんな、不思議な暖かさを持っている女性
だった。

「お帰りなさい、シヨーマさん。今日は魔法の練習をなさったんで
すってね」

「ただいまリノンさん。知ってるんですか？」

「ええ。さっき戻ってらした方々が話題にしてたんです」

「ああ、そうなんだ」

シヨーマはあの後寄り道してたので遅くなったが、すぐに戻ってきた生徒もいたのだろう。

「……魔法、ちゃんと出来そうですか？」

「え？ ええ。大丈夫ですよ……たぶん」

そう尋ねてくるリノンの表情はどこか不安そうだった。

「シヨーマさんも、きっと騎士になって……私達を守ってくれるために、戦ってくれるん……ですよね」

(……………え)

別に騎士になりたい訳では無かった。誰かを守るために戦いたいとも思っていない。あくまで士官学校で学ぶ理由は、自分の能力で誰かに迷惑をかけたくなかったというだけだ。

けれど、この人にまっすぐ見つめられてそんなことを聞かれては、否定できなかった。

「……………頑張ります」

いまひとつ頼りがいの無い台詞だと、我ながら思うシヨーマであった。

「……………ふふ。ありがとう」

そんなシヨーマにリノンはまた優しい笑みを向けてくれた。

「あ、鍵……。すいません話し込んでしまっ」

「い、いえ、そんな……。あ、それじゃ、これで」

鍵を受けとると、つい慌ててその場を立ち去ろうとしてしまう。

そんなシヨーマの背中にリノンは聞こえるかどうかという声でささやいた。

「私は、シヨーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです」

部屋に戻ったシヨーマは、そのままベッドに倒れこんでいた。

（なぜ俺にそんなことを……。あの言い方だと気があるように思っ
てしまうぞ……。ああいやきつとそう、社交辞令かなんかだろうそ
うに決まっている変な意味なんて無いしこんなことで浮かれたらみ
つともないし恥ずかしいああでも）

去り際にかすかに聞こえたリノンの言葉をつい深読みしてしまう。
確かに美人で優しそうな人だし、好意を向けられたら意識はしてし
まうだろう。もちろん嫌だなんて思わない。

（でもまだ会って数日だし、交わした会話も全然多くないし。いく
らなんでもその程度でそんなことあるわけ……）

などと考えていると何故か頭にはメリルとセリア、最近出会った
少女達の顔が浮かんでくる。

（なんでだ……）

確かに2人とも方向性は違えどリノンと並ぶ美少女と言える。急
に目を引く女性に立て続けに出会ったものだから頭が変になったの
だろうか。

（いやいや違う。そもそも記憶を失って以降、人との交流自体がま
だ少ないし、特に多かった人物が浮かんでくるだけだ、うん）

そう考えたらオードランのお爺さんやその奥さん。レウスなんか
の顔も浮かんでくる。それから……。そうだ。そのレウスに突っかか
っていた彼、デュランのことも。

思い出すとまた彼のことかまた気になり始めた。あそこまで必死
になる理由とはなんなのか。

自分には、何の過去も無いからだろうか。

……過去が無ければ、未来への願望も無い。

記憶は取り戻したいが、それはあって当たり前前の物だ。誰だって
失えば取り戻したいと思うだろう。それは今考えている物とは違っ
と思う。

つまり、そう。セリアのように、過去の後悔から未来への願望を
抱いたような。多分デュランにもそういう何かがあるのだと思う。
そういう物を、シヨーマは持っていない。

……だから、他人の願望に興味を持つのかもしれない。自分は持てなくても他人のを知れば、持てた気になるから？
……わからない。

私は、シヨーマさんを守ってもらえたら、嬉しいです。

それなら。

シヨーマ自身の願望。記憶を取り戻すこととは、また別の何か。それを、探してみようかと思った。

目指すべき道 (2)

朝。いつもと変わらぬ笑顔でリノンはショーマを見ている。

「おはようございます。今日も頑張ってくださいね」

「おはようございます……。えっと……。その」

昨日かけられた言葉が気になってしまっ。どう相對したものか。

しかしリノンはまるで変わることに無い様子で、やっぱり自分の考えすぎなのだと思うってしまった。

「あ……。鍵です……。はい、これ」

結局そんな事務的な会話しか出来なかった。

「はい。お預かりします」

「そ、それじゃ」

「はい。お気をつけて」

かくして、なんとなく逃げるようにショーマは寮を出てしまった。

黒魔法科。

今日は実践ではなく、教本を読んでまた新しい魔法を修得する日だ。

黒魔法科の授業内容は、教員の解説を聞きながら、配布されたり室内に蔵書されている教本を、自分で解読しながら読み込み、それぞれ自分のペースで修得していく。出来たと判断したなら教員にその結果を試験してもらい、合格を貰えば定期的に行われる実践訓練を受けられる。そこで実際にその魔法を発動し、成功できれば正式にその魔法の修得が認定される。

それとは別に戦術、戦略考察を主とした講義もあり、そこでは訓練の手を止め、戦場での立ち回りなどが指導される。

最終的に規定以上の魔法を修得し、魔導師としての知識が十分に

あるかを確認する筆記試験をパスすれば、黒魔法科は修了とされる。
ちなみにこの辺りは白魔法科もほぼ同じである。

シヨーマはまず知り合いの姿を探す。すぐにセリアが見つかったが、どうやら別の生徒と話している様子であった。

どうしたものかと迷っていると、向こうの方から見つけられてしまった。シヨーマの気をよそに、早く来いと手を振っている。

「…………おはよう」

「おはよう。…………ねえねえねえ、この人がほら例の」

挨拶をすると早々、セリアは一緒にいた女子生徒達にシヨーマのことを紹介しようとする。

「れ、例の王子様ですね！」

「だから違うって！」

「あ、ごめんごめん。彼が例のシヨーマ君」

「どうも」

「で、この2人はミモットとコニー」

「シヨーマさん……………ですよね。私はミモット。セリアちゃんから聞いてます」

「コ、コニーって言います。ど、どうも……………へへ」

セリアから紹介された2人は挨拶する。

「シヨーマ・ウォーズ力です」

倅ってシヨーマも挨拶を返す。

「昨日あの後色々考えてね、この際集まって一緒に読んでみようか、ってことになったの」

セリアが現在の様子を語る。

「首尾は？」

「まあまあ……………ってところ？」

「まあまあか……」

曖昧な表現だった。今日も四苦八苦は続きそうである。

シヨーマも一緒になって悪戦苦闘していると、

「おはよう」

いつの間にか隣の席にメリルが座っていた。

「うわ、びっくりした」

セリア達も驚いていたようだ。もっとも彼女らは、かのドラニクス家の人間が、という点に驚いたのだが。

「……随分と仲が良さそうね」

「え、あ、いやこれは……」

どこか不機嫌そうな声音に若干顔がひきつる。何か嫌なことでもあったのだろうか。

「あ、この子達、教本が難しくって悩んでてさ、手伝ってやれないかと」

「ふうん……？」

セリア達に目を向けるメリル。

「あー、あ、あの、その」

つい気圧されるセリア達。

「何かしら？」

言いたいことがあるなら言ってみるとばかりに、メリルは鋭い視線をセリアに突き刺す。間の席にシヨーマを挟んで。

一方でセリアはいつものはつらつさはどこへやら、思いっきり目が泳いでいる。

（何この状況……）

ミモットとコニーは声も出ないようであった。これではいじめのようではないか。

だが均衡を破ったのはセリアの方であった。

「あああ、あの！ わた私達だけじゃ、あの、これ、魔法教本、その、ちんぷんかんぷんで！」

「……………」
「あ、でも全く手がつけられないほどでは無いんですけど、この調子じゃ初級魔法にどれだけ時間かかるか知れたものじゃないな」
「て、ああああのその」

「……………」

「おおお、………… お力を、ドラニクスさんの、お力を貸して貰え、い、頂けたらなんとか、なるかも知れないかなって！」

「私の力を？ 貸してほしい？」

「は、はい！ 貸してほしいです！」

「あ、お、お願いします！」

「お願いします！」

物凄くしどろもどろになりながらも、セリアはなんとか力を貸して欲しい。その言葉を口にした。その様子に驚くばかりだったミモツトとコニーも、最後には一緒に頭を下げた。

対するメリルは悠然と構え、実に落ち着いた物だった。

さすがに異様さを感じたシヨーマだったが、メリルにはそうでも無かったようだ。鋭い視線のままセリアの頼みの言葉を、時折誘いながらじつと聞いていた。

しかしてその返答は、

「良いわよ」

えらくあっさりしたものだった。

「え、良いの？」

驚いたのはシヨーマもであった。

「自分達では手に余るかもしれない、と、ちゃんと認めた上で私に頼ったのでしょうか？ ならば責任を持って手を差し出すのが上に立つ物の務めです」

「上って……………」

確かにメリルの家は上等な名家らしいが、同じ学生だろうにそこ

まで態度がでかくて良い物かとシヨーマは思ってしまった。

「あ、ありがとうございます……」

だが当のセリア達は安堵して、すっかりおとなしくなってしまうていた。

「本当は最初の1冊は自分の力で読み取ってほしかったけど、まあ良いわ。」

「……じゃさつそく始めましょう。まずは文字に込められた魔力の属性を把握することから始めるのが良いわね。『アイスストーン』は教本も含めて初心者向けとして作られているから、使われている属性も分かりやすくだだ1つよ。何か分かる？」

さつそくメリルはヒントを与え始めた。

「えっと……なんだろ」

「青、でしょうか」

セリアにはわからなかったようだが、ミモットが答えた。

「そう。正解。自分の属性に近いと分かりやすいと言うけど、慣れればその辺はあまり問題は無いわ。」

属性が分かったらそれに対応する方法で、今度は自分の魔力を流し込むの。同じ属性なら文字の魔力を濃くするように、半属性なら割り込んで押し出すように、といった具合ね。ぼんやりとした状態の魔力を感じられやすくなるのが目的。やってみて」

「あ、はい！……んん、ちょっと、難しいですね」

「最初の内はゆっくり丁寧に心を上げると良いわ。何度もやっぴくうちに慣れてくるから諦めないで。」

「……よく言われる、修得に2週間前後かかる。というのはね。この事に気付くまでに1週間。そして後の1週間で全文を読み取るから、と言われているわ」

「じゃあ私達は……」

「まだ1週間かけて、焦らずじっくり頑張る必要があるわね」

「おお……！」

メリルの指導を受け、セリア達3人は感銘を受けているようだった

た。1ヶ月かかるかも、なんて弱気だったのを思えば、それも当然だろうか。

「良かった……。正直絶対断られると思ってました……。これで何とかなりそうです」

「貴方達はその姿勢が良かったから、応えたの。調子に乗っちゃダメよ」

「……あ、はい！　ありがとうございます！　もうちょっと頑張ってみますね！」

「『もうちょっと』じゃなくて『最後まで』」

「はい！」

「正直俺も意外だったよ」

せつせと教本を読み解いている3人を横目に、シヨーマはメリルに話しかける。ひよっとして教えたくてしょうがなかったのでは？とすら思った。

「上に立つ者の務め、って言ったでしょ」

「そこが良くわからないんだけど」

「ああ……」

メリルはそういえばシヨーマが一部の常識も忘れていることを思い出した。

「この国では、貴族と平民の差が強いつてのは、分かる？」

「平民は本当は士官学校にも入れてもらえないし、寮も分けられるんだろう？」

「そんな程度じゃ無いわよ。もっと過激な考えをする人もいるし。

平民を人間扱いすらしないという貴族も珍しく無いわ」

「そんなに……？」

「その辺の考え方はまあいくらか違いがあるけど、少なくとも到底埋められない貧富の差なら、確実にあるわね。」

……私は生まれつき何でも持つてる富裕層の側で、貴族も平民も平等であるべき。なんてまったく思わないくらい、身も心も貴族であるつもりだけれど、だからこそ貴族は……、「力」を持つている者は、持っていない者に「責任」を負うべきだと考えるわ」

「『責任』？」

「例えば武力であるとか、権力であるとか。財力等も。使いようによつては人の命くらいなら簡単に左右できてしまう。そういう『力』を正しいことに使うという、『責任』。」

と言つても、ただ無闇矢鱈に施しを与えれば良いって訳でも無いわ。

力を持つ『強い者』は力を持たない『弱い者』をただ無条件に守るため、その力を行使すれば良いのではない。それは結局『弱い者』による立場を利用した『強い者』の支配と言う、逆転構造なだけ。

だから、強い者は『力』を真に必要としている者を見極め、必要な分だけを与え、あとはその者自身の『力』に託すの。さつき私が彼女達にしたようにみたいだね。

弱いことを自覚し、強い者に頼る。強い者は力を無闇に振りかざさず、助けを求める声に応える。助けられた者は、結果を果たすこととでその恩に報いる。

当たり前のことを認め、真摯に受け止める。それが『責任』という物。強い者と弱い者のそれぞれにとってね」

「……自分じゃどうしても出来ないことには力を貸すけど、出来ることには貸さないってことか。助けてもらった側は、ちゃんとそれを活かして最後まで目標を達成させる」

「かいつまんで言えば、そういうことね」

少し長い話を聞かされてしまったが、メリルの心根にしているものがどこか見えた気がした。

「貴方はどうなの？」

「え？」

「貴方は自分の『力』を責任持って扱える？」

……その問いかけは、何か大事なことを試されている。そう、感じられた。

考える。

メリルの言うことに賛同するならば、力に責任を持つということ
は、自分の『能力』をただ制御できれば良い。という考えでは間違
いだ。『とりあえず誰かに迷惑をかけるようなことが無ければそれ
で十分』という考えではいけない。もしこの『力』を求める者がい
たとしたら、それに応えて初めて『責任』を持ったと言えるだろう。
だが、それはシヨーマが『強い者』であるならの話だ。

そんなことは無い。力なんて欲しくなかった。誰にも迷惑をかけ
ないようしつかり押さえつけて、静かに暮らすならそれで良いだろ
う。誰かの助けになんて応えられない。自分は『弱い者』なんだ。
……そう言って否定の意思を表せば、その意見はきつと認められる
だろう。

どちらを選んでも、きつと彼女は受け入れる。

ならば、選ぶのは、シヨーマがこの『力』をどうしたいか……。
それによる。

それなら……。

「持ちたい。と考えているよ」

選んだのは『強い者になりたい』だった。

「……でも今ははつきり『持っている』とは言えない。今の俺には
……自分を支えられる物が無いから。目指すべき物を、見つけられ
ていないから」

それが偽りの無い今の気持ちだ。他人に迷惑をかけたくないとい
う考えは、結局のところ過去の経験から来るものでは無い。あくま

で記憶が無いなりにだが、一般的で常識的な感覚によるものだ。
何より、支えに出来る物を探そうとは、昨日決めたばかりだった
のだから。

私は、シヨーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです。

あの言葉に応えたいと、思った。

「そう……」

メリルはそれを聞くとしばし黙考し、

「悪くない答えだと思っわ」

優しく微笑んで、シヨーマの意見を認めた。

「……ありがとう」

「……そうね。じゃあ、そう思うならさっさと行動しましょうか」

「え？」

「ちゃんと責任、持てるよう。まずは下級魔法から順に使いこなせるようにしていきましょう」

メリルは椅子から立ち上がる。

今は、授業中だった。

「あー、ところでレウスは……？」

「今は剣術科に行ってるわ。ここに来る前会って話したから。何か気になることがあるみたい」

(デュランのことかな……)

「それよりさっさと覚えるだけ覚えて試験受けて実践しに行くわよ」
メリルは本棚から下級魔法の教本を見繕い積み上げていく。

「俺は覚えることより経験を積みたいんだけど」

「覚える物覚え尽くしたらいくらでも実践させてもらえて経験積み

るんじゃない？ 下級魔法なんてそんな扱いに困るものでも無いし、それならさっさと済ませて中級上級に時間をかけるべきよ」

「そ、そういう物かな……」

それにしてもなぜこんな協力的というか、強制的なのだろう。そんなにさっきの問答が気に入ったのだろうか。

「それに貴方の言っていた……不用意に魔法を発動させて迷惑をかけたくない？ って言うのも、正直、志が低いと言えるわね」

「う、わかってるよ……。俺も『責任』、てやつを持ちたいし」

「なら口答えしないでさっさと読みなさい」

「はい……」

初級魔法教本、13冊が積み上げられていた。

「目が疲れる……」

魔法教本を読み解くという行為自体に苦は無いても同然なのだが、13冊の本を一気に目を通すというのは普通に疲れる行為だった。

ちゃんとこの後の白魔法科でも下級魔法はさっさと覚えておくのよ。良い？

白魔法科には参加しないメリルは釘だけ刺して、自分は竜操術科の授業に行ってしまった。

白魔法は人の怪我を癒したり、瘡気を被ったりと、割と分かりやすく人の役に立つ魔法が多い。『責任』を持つならこちらの方が活躍の機会は多いかもしれない。

「やあ、シヨーマ。おはよう」

授業が始まるまで教室で待機していると、レウスに声をかけられた。

「ああ、おはよう。剣術科行ってたんだって？」

シヨーマも挨拶を返す。

「ああ。昨日は中々良い経験が出来たからね。体を動かしたくて」

「あ、昨日の……結局どうなったんだ？」

攻め立てていたのはデュランだったが、結果自体はほとんどレウスによる一方的なものに見えたが。ていうか、良い経験って……。

「結局彼の方がダウンしてしまったよ。回復魔法もかけておいたし、大丈夫だろう。今日は来てくれなかつたけど」

「お前が痛め付けすぎて嫌になつたんじゃない……」

「そのくらいでへこたれるような人物じゃないさ。剣を交えればそういうのはわかる」

「そういう物が……？」

楽観的などころがありそうなレウスだ。なんでもかんでも好意的に考えているだけじゃないかとも思ってしまう。

「それより君もなんだかお疲れ気味のようだね」

「ああ、まあ……ちよつと積極的になつてみようかと」

「へえ……？ 聞かせてくれよ」

「ああ……」

それからというものの、時間は矢のように過ぎていった。

やりがい、とでも言うのだろうか。これから進みたいと思えることを見つけたシヨーマは、駆け抜ける様に日々を過ごしていた。

そして入学から約4週間。シヨーマは中級魔法のいくつかまでを修得し、一番最初に覚えてしまった上級魔法、『サンダーストーム』を含めた実践訓練を行うため、士官学校から少し遠出した場所にある、廃材置き広場に來ていた。

ちなみについ先日、無事3つ目の初級魔法を修得し、一緒に参加できそうだと喜んでいたセリアは、シヨーマとは別の場所で行うことを知り、とても残念がつていた。

今日の実践は広範囲に効果が及ぶ黒魔法を修得した者のためであり、シヨーマを含めて4人のみの参加となっていた。他の参加者は

双子のリシウス・オーディナ、サーナ・オーディナの兄妹と、竜操術科の合同授業として参加しているメリルである。

指導教員は黒魔法科からラーニヤ教員と竜操術科からアウディ教員が参加し、さらには大きな魔法を使うため、補助員として騎士団から派遣されたルーシェ・ヴィアンヌが参加していた。

「騎士の人まで来るのか……」

「失礼の無いようにね」

シヨーマはメリルと囁きを交わした。

……思えば不意にこの『サンダーストーム』を放ってしまったことが、今ここにいることの始まりだった。

この力を制御する。それが最初の思いだった。今はもっと、『活かす』ことを考えている。

「それではさっそく始めましょうか。まずはシヨーマ・ウォーズカ君」

「はい」

上級魔法『サンダーストーム』……。暴風を巻き起こし対象を閉じ込め自由を奪い、その中に強烈な雷撃を次々と撃ち込む黒魔法だ。その威力はまさに破壊的。大軍勢を一撃で凪ぎ払うとも言われているほどだ。

ゆっくりと魔力を練り上げる。以前は慌てていて、ほぼ無意識にかつ急速に練り上げてしまっており、精度がかなり雑だったことが今ならわかる。

続けて術式を組み上げる。こちらはそう形が崩れたりもしない。落ち着いて確実に行う。

「うん。出来ましたね。では一発派手にやっちゃっていいですよ」

正直なところまだ怖いという気持ちはある。あの時の失敗。死傷者こそ出なかったものの、ずいぶんと背筋が冷える思いをした。学校の授業が始まってすぐには積極的になれなかったのもそのせい

だ。

でも今は、違う。

「『サンダー……ストーム』!!」

目標と見定めていた廃材の一角を中心に、風が巻き起こる。一瞬にして砂と廃材を巻き上げ、暴風へと成長する。そして激しい雷鳴が数秒間に渡って鳴り響く。

やがて風がかき消えると、その場はまさに焦土。雷撃を受けいくつかの廃材には火が燃え移っていた。

「はい。良く出来ました。もうちょっと強く魔力を込めても良かったですかね」

「あ、はい。ありがとうございます」

「はい、では次はオーディナ兄妹方。……今日は人数が少ないのでたくさん練習出来ると思いますよ」

シヨーマの様子に、満足がいつていないことを見抜いたラーニヤ教員は助言をする。シヨーマとしても、今日はそういう期待をしていた。

「まあ、これからって感じかしらね」

そっけない感じでメリルはシヨーマの『サンダーストーム』を評価した。

「そうだね。これからだ」

シヨーマは軽い言葉でも真摯に受け止める。

その様子にメリルは意外そうな顔をしたが、すぐに少しだけ不機嫌そうな顔になり口を尖らせた。

「……ふんだ」

その様子にシヨーマは笑みをこぼす。

「ほら、そろそろメリルも準備しなよ」

「わかってるわよ」

いつのまにかさん付けやめてるし……。

ひっそりと誰にも聞こえないよう、セリアはひとりごちた。

若い騎士候補生達を見つめる騎士ルーシエには狙いがあった。

既に抜きん出た才を持つ者を見極める。それこそ將軍級の器の持ち主。はたまたもつと大きな、国を動かしていくことになるであろう、未来の力を探し出す。

騎士団大隊長の1人、ブレアス・ブラウブの命であった。

せつかくだ。そろそろ戦を経験させて良いと思える者を見繕ってきてくれ。

……まだ学び始めて1ヶ月弱。さすがに時期尚早すぎるとルーシエは考える。だが、將軍級ともなりうる者ならば、たかが中隊長の自分の考えよりずっと上に行くのかもしれない。いや、そうでなくては困るのか。

……慎重に見定める必要がある。ルーシエはまずはこの4人の若者達をくまなく見定めることとした。

第1小隊、集う

リヨール士官学校新1期生が入学して1ヶ月半が経ったその日。彼らの中から特別に選抜された16名が召集を受けた。

ブランジア王立鳳凰騎士団による、13箇所もの魔族の拠点への総攻撃作戦。その拠点の1つが騎士候補生に任されることとなったのだ。

講堂に集まった彼らの前にボンボーラ教員が立つ。

「えーこれは諸君らにとつて、初の実戦となります。急な話ではありますが、どうかこれは好機だと思ってください。人より早く、1つでも多く経験を積んだことは、いずれ騎士となった時、大きな財産となるのですから。」

……まさか辞退したいと言う者はいませんか？」

拒否など認めない。という調子であった。

何より、自ら士官学校に志願したのなら、誰もがいずれ戦闘行為に参加することは、すでに覚悟の上のはずなのだ。普通は。

とはいえまだ入学して1ヶ月半の新人。自信のある者無い者、混在していた。思いもかけない急な実戦への参加命令に、戸惑いを隠せない者は多い。

「不安ですか？ ですがまあ、今回の任務は正規作戦のついでのような物。1番の目的は君達に経験を積ませることなのです。えー攻撃対象の拠点は小さいものですし、支援者として騎士団から中隊長を勤めている方が2名派遣されています。彼らがこの作戦に随伴します。危険はほぼ無いと言って良いでしょう」

ボンボーラは傍らに立つ2人の騎士に手を向ける。

「紹介します。えーこちらは『黒騎士』のクラスを持つルーシエ・ヴィアン又殿。そしてこちらは同様に、えー『白騎士』のクラスを持つロックス・バネン殿です。彼らがいる限り、少なくとも作戦に失敗は無いです。安心してください。……とはいえ、あくまで

も作戦の主役は君達です。自分達の身は自分達で守り、自分達の敵は自分達で倒す気でいるように。

えーそれではよろしくお願いします」

真紅の甲冑に身を包む女性騎士、ルーシエから作戦の具体的内容が発表される。

「紹介に預かった騎士、ルーシエ・ヴィアンヌだ。

今回君達が攻撃する目標は、ここリヨール士官学校より南方へ8時間ほど行った場所に存在する廃村に住み着いた魔族どものねぐらだ。事前調査からの危険度判定は最下位のDランクとなっている。

明後日0800時よりここを出立し、途中、簡易拠点を設置し夜営を行う。ここで小隊を直接攻撃部隊と拠点防衛部隊の2組に分ける。攻撃開始は翌昼前ごろとなる予定だ。

目標の廃村では敵拠点が2ヶ所に別れているため、片方を殲滅した後、小隊の役割を入れ替え、もう片方を殲滅にかかる。どちらの小隊にも攻撃と防衛を経験してもらおうわけだ。

両拠点を攻撃し終えるのは夕方ごろの予定だ。もう一晚をそこで過ごしたら、拠点を撤収し、リヨールへと帰還する。以上が作戦の概要だ。

それでは隊の内訳を発表する。既に教員方と会合を済ませ君達の戦力バランスを考慮し、小隊長を含め決定してある。ではロックス、よろしく」

「はい。騎士、ロックス・バネンだ。……まずは第1小隊。小隊長、レウス・ブロウブ。以下、バムス・ワグマン。デュラン・マクザス。ローゼ・クラリア。メリル・ドラニクス。フィオン・マニ。セリア・フォール。そしてシヨーマ・ウォーズカ。以上8名だ。

続いて第2小隊は、小隊長、リシウス・オーディナ……」

初の実戦。急に召集を受け、小隊を組まされさあ戦えと言われて、

不安に感じるところは多かった。だが実際はショーマとは割と仲の良い人物が多く、いくらか安心感があった。これが初めて顔を付き合わせる者しかいなかったら、記憶喪失のことやら、能力のことやらから、いちいち説明するところから始めなければいけなかったかも知れない。バランスを考慮した、とはもしかしてそういう要素まで気にしているのだろうか。

だが、少々解せない部分もあった。

ブラウブ家のレウスは実際実力もあるし、リーダーとしてのカリスマもある。納得だ。

早くも魔法系科目では学生トップクラスの座となったメリルとショーマ本人の選抜にもまあ納得ではあった。

顔を合わせたことの無い面子は未知数なので置いておく。

そう。果たして、デュランとセリアは抜きん出るほどの物を持っていただろうか。しばらくデュランのことは見ていなかったから、案外急成長しているのかもしれないが。

となると問題はまあ、セリアだ。メリルの助力のおかげか、全くの素人にしては、今の彼女の修得済み魔法は多い方と言えた。だが名家出身者には彼女より上の実力者はもつといただろう。

案の定セリアの様子をうかがうと、自分は場違いなんじゃ？とばかりに居たたまれない様子でいる。私語は禁止されているので何も言ってもやれないのが申し訳無い。

果たして、このメンバー選抜にはどういう意図があるのだろうか。

小隊の内訳が発表されると、作戦に必要な物品の準備に関する説明がされる。

戦闘用装備と、行軍、夜営などに必要な資材、食料などは、申請を行って学校の備品を借り受けることを許可する。自前で用意する場合は整備、確認を必ず行っておくこと。その点も含めてこの後、

小隊メンバーで打ち合わせを行い、お互いのことを確認しておく。

作戦が開始されたら行動の指針は2人の小隊長に委ねられる。随伴する騎士はあくまで付き従い、いざという時に助言や戦闘援護をするだけとする。

それから作戦内容の詳細は基本的に外部へは漏らさないこと。など。

「説明は以上。進軍開始の明後日0800時の30分前には装備を整え、校内中央広場に集合せよ。何か質問はあるか」

「はい」

不機嫌そうに眉を寄せている男子生徒が手を挙げた。

「名前を」

「バムス・ワグマン」

武門に秀でた名家の1つ、ワグマン家の嫡男であった。いずれ家を継ぎ一族を担うことになる、若い輝きの持ち主だ。

「よし。聞きましょう」

「メンバーの選抜理由について聞きたい。……まだまだ実戦で使えそうも無いヤツが混ざっているように思えるが？」

セリアがその言葉に、びっくりと肩を震わせていた。あの物言いはシヨーマもムツとなる所はあったが、今は大人しくしておく。実際、シヨーマもその質問の回答には興味がある。セリアには後で何か言葉をかけておこうと決めた。

騎士ルーシエが答える。

「教員方と会合を行い、作戦に参加するのに十分必要なだけの修練を積んだと認めた者から選出している。問題は無い」

「だったらもつと使えそうなヤツもいたと思うが？」

「成績優秀な者から順に選抜したわけでは無い。小隊内の戦力バランスを考慮して決めさせてもらった」

「答えになっていないな」

言い訳じみた回答に、バムスは納得しない。

「では言おう。……例え現在の段階で未熟であっても、今後の成長を期待させる者から数名を選ばせてもらった」

「足手まといを抱えろってことか？　だがその今後の成長とやらも死んだらそこでお仕舞いなんだぞ」

「小隊内の戦力バランスを考慮して決めていると言った」

「ハッ。結局足手まといを抱えろってのは否定しないか。まあ良い……質問は以上かね」

「ああ。フン、ありがとうございました」

不服ではあるが納得はしてやるといった様子であった。

「うむ。他に質問の有る者は？」

「あ、はい……よろしいですか」

気の弱そうな女子生徒が手を挙げた。

「名前は」

「はい、フィオン・マニ、です」

「よし、聞きましょう」

「その、もし、……し、死んで、しまったら、どういう扱いになるんでしょうか……」

「今回は騎士団の作戦の一貫ですので、騎士団員として戦死扱いとなります。騎士団長から勲章が与えられるでしょう」

「あ……、わかり、ました。……あ、ありがとうございました」

フィオンという女子生徒は消え入りそうな声で質問を終えた。

「他に質問の有る者は？　……いないようですのでこれで解散とします。この後小隊メンバーで集まり打ち合わせを行っておくこと。

それでは、明後日にまた会いましょう。ボンボラ殿。我々はこれにて」

「ええ。では明後日に、またよろしくお願いします」

講堂から去っていく騎士を見送りながらショーマは、死んだらそこでお仕舞い。その言葉を噛み締める。難易度の低い作戦とは言え、命の奪い合いに違いは無いのだ。

もし死んでしまったら、どうなるだろう。痛いだろうか、苦しんだろうか。残された皆は何を思ってくれるだろうか。

レウスは、メリルは、セリアは、リノンさんは、オードランのお爺さんは。

…… 上手く想像できない。

(…… 怖いな)

だが怖がっていても進めない。やると決めたことが有るのだから。覚悟を決めようとする。

「よし、それじゃ第1小隊のメンバーは集合してくれ！ 打ち合わせを始めよう！」

レウスが集合をかける。小隊長として、彼には皆を率いる責任があるのだ。

第1小隊メンバーはショーマにも馴染みの有る人物が多い。レウスやメリルは心強い存在だし、気心の知れた友達のセリアもいる。親しいとまでは言えないが、以前見たデュランの負けん気は信頼に足るだろう。

問題は残りの3人だ。

(げ……)

その内の1人は先程の暴言とも言える言葉を発した男、バムスであった。小隊のメンバーが発表されたのは彼が発言する前だったので、同じ小隊だということには今更気付いた。

案の定、セリアは彼には近付きにくそうにしており、目を合わせないようびくびくしている。ここは何か言っただろうかと考えたが、

「足手まといにならないよう、お互い頑張りましょうね。バムス・ワグマン君」

メリルに先を越されてしまった。

「フン、……精々尽力させていただきますよ。ドラニクス嬢」

この小隊内でも、1、2を争う実力者にそんなことを言われては、バムスも大きい態度は取れなかった。そんな様子について呆けてしまいうショーマだったが、メリルがああ言ってくれたのなら、自分はセリアに声をかけるべきだと思い、立ち直る。

「セリア、あんまり気にするなよ。……今回は、みんなで協力しあう必要があるわけだし」

「あ、ショーマ君……。うん、わかってるよ。正直不安で一杯だったけど、ああいうこと言ってもらえるたら、うん。頑張れるよ。……それに、騎士の人から期待されてるって、言ってもらえたわけだし」

「そっか」

「……かっこいいよね、彼女」

「そうだな……」

凜と振る舞うメリルには、きっと誰だって目を奪われるのだろう。ショーマにだってそう感じることはこれまでもよくあった。

「ほら、そろそろ始めるよ。じゃあまず円になって集まろうか」

レウスの呼び掛けに、今回行動を共にすることとなる8人が円を描いて座る。

「では自己紹介から始めよう。僕から時計回りの順で、専攻科目や得意技、苦手なことなど有れば言ってくれ。それでは。」

……レウス・ブロウブ。今回小隊長を任された。専攻は剣術科。補助に白魔法と黒魔法。どちらかと言うと白魔法の方が得意だ。

今回の作戦では、みんなには自分出来ること、出来ないことを

しっかりと把握してもらい、協力して成功させることを意識してもらいたいと考えている。以上だ」

「メリル・ドラニクス。竜操術科専攻です。補助に黒魔法科。得意なことは広範囲攻撃魔法。個別の白兵戦や補助魔法の類いは少し苦手と言えるわ。連携するとなるとこちらの都合に合わせて動いてもらうでしょうから、よろしく。以上よ」

「シヨーマ・ウォーズ力です。えっと、黒魔法と白魔法をそれぞれ。攻撃、回復、共に覚えてはいるけど、実際の戦闘に関してはまだ素人です。上手くないことが有るかもしれませんが、よろしく。

……以上です」

「あ、は、はい！ セリア・フォルです。下級黒魔法が4つ使える、だけ、です……。頑張ります……。あ、以上、です」

「ローゼ・クラリアです。専攻は弓術。スキルランクはAから9に昇級したばかりです。近接や魔法は出来ません。以上です」

「あ、えっと、フィオン・マニです……。薬師術科専攻です。爆薬とか得意です。治療薬の調査はまだ苦手ですけど、使用は出来ますので、学校から借りられるだけ、用意しておこうと思います……。以上です」

「バムス・ワグマン。格闘術科専攻だ。ランクは6。以上」

「……デュラン・マクザス。専攻は剣術と槍術。今は槍の方が主力だ。……それから、魔法は全般的に不得手。以上だ」

それが第1小隊、最初の8人の初めての顔合わせであった。

「うん。近接が3人、魔法が3人、弓が1人に薬師が1人。確かにバランスは良いね。ただ攻撃に寄りすぎかな。……それじゃシヨーマ、君には黒魔法より白魔法を優先してもらいたい。フィオンも、回復薬を優先的に準備しておいてくれ。この2人を主な回復役とする」

「ああ、わかった」

「は、はい。鞆から出しやすいように、しておき、ます……」

「うん、頼むよ。」

では次に、実際に拠点を攻める際の具体案を考えよう。各々の能力を活かすことを考えるとまず、安全な場所からメリルの大規模魔法で、ねぐらにされている建物ごと先制攻撃を仕掛け、その後撃ち漏らした敵を弓と近接隊で各個撃破して片を付ける。という形が良いと思う。

その際弓担当のローゼ、君は出来れば敵の接近できない、何か高台のような場所に陣取って、安全に狙撃出来るようにしてもらいたい。これは実際にその場に行かないと出来るかわからないけどね。

首尾よく陣取れそうな場合、護衛にセリアを付けようと思う。万が一接近された時も、魔法を待機状態にしていれば、初級魔法でも素早く対応できて、安全に迎撃出来るはずだ。接近された敵の数が多い場合は、臨機応変に他のメンバーから護衛を追加させるから、持ちこたえて欲しい。

回復役をやってもらうショーマ、フィオンは近接3人の後方で待機していてくれ。戦闘に巻き込まれないよう程度には遠く、お互いの援護がすぐ出来る程度には、近くね。場合によってはローゼ、セリアの方に向かってもらおう可能性もあるだろう。

大体こんな考えだけど、皆はどう思う？」

レウスはひとしきり自分の案を出し終わると、他メンバーの相談を仰ぐ。

「よろしいでしょうか？」

弓術師ローゼが拳手をした。

「どうぞ」

「メリル様の大規模魔法とは具体的にどの程度の破壊力が有るのでしょう。想定より敵拠点が大型だった場合、効果が薄い場合が有ると思われれます」

「うん。そこはメリル本人から答えてもらおう。君が今使える最大威力の魔法はどれか教えてくれ」

「威力と効果範囲で言えば『タイダルフレイム』かしら。最大直径

30メートルぐらいまでなら行けるわ。でも『アイススピア』の3重発動の方が効率が良いかも。こっちは1発ごとに直径8メートルつとところだけど。まあ拠点の形状次第で決まるわね」

「3重発動……」

誰かが小さく驚きを口にしていた。

「……わかりました。それほど使い手ならば問題は無さそうですね」

その答えに頷くローゼ。レウスはついでにと補足する。

「うん。それにショーマにも黒魔法『サンダーストーム』があるから攻撃力が足りないということは無いと思うよ」

そこにデュランが異を唱える。

「待て。そこまでされたら他の連中は出る幕が無いぞ。戦果無しで帰れと言うのか」

「うーん。誰かが頑張っても誰かが頑張れなくても、上手くいけば小隊全員の戦果だし、上手くいかなければ小隊全員の失敗ということ。では駄目かな」

「ただ見ているだけなのは経験を積むとは言わん」

レウスの返答には不満そうなデュランである。

「それは僕も思うよ。まあそうだね。わざわざ手加減するようで癪かも知れないけど、メリル、一撃で終わらない位の魔法を選んで攻撃してくれるかい？」

「ええ。構わないわよ」

「ふん……まあ良いか」

それで一応は納得したようだった。

だがそれに対し何か言いたげな男がもう1人現れる。

「おいデュランとか言ったか」

バムス・ワグマンであった。

「お前、随分戦果が欲しくてたまらんようだが……。功を焦って先走って隊の和を乱したりなんかするなよ。そんなんでも不用意に負傷するようなバカがいつの時代にだっているもんだが……。そういう

のを足手まといっけ言っただ。知ってるか？」

先程の暴言を今度は直接投げつけた。だが大人しく聞いておくだけのデュランでは無い。

「俺の知っている足手まといという言葉は、口先だけ達者で何の役にも立たない奴を指す物だったが」

「フン。言うじゃないか」

「やめないか2人とも」

一触即発の空気に、さすがにレウスが割って入る。

「気がはやるデュランの気持ちも、心配してくれるバムスの気持ちもわかるが、そういう態度はお互いやめよう。さすがに戦場でまでそんな調子でいられたら困るぞ」

「……………」

「フン」

2人も本気で言い争うつもりは無いようで、その場はすぐおさまった。

「とにかく、作戦を無事に完遂させることが最大の目標だ。無事に、つていうのは全員何事も無く生きて帰るつてことだよ。良いね？」

「ええ。月並みな言葉で言えば、皆で力を合わせて頑張りましょうつてことかしら」

レウスが釘を指す。そしてメリルが補強するように続けた。

「それじゃ、特に意見や質問、代案等が無いならこの方法で行こうと思う。賛成か反対かの意見を聞かせてくれ」

「ふん。まあ足手まといの自覚がある足手まといなら抱えてやるのもやぶさかではないさ。………… 小隊長殿。あんたの案に賛成の意を表しよう」

「小隊全員の戦果。まあ今はそれで納得しておくさ。レウス、お前の案に賛成する」

バムスとデュランが一番に賛成する。

「私も問題ありません。賛成です」

「うん、お前に任せるよ。俺も賛成だ」

ローゼとシヨーマが続く。

「わ、私も、賛成……！ 未熟者ですけど、私なりに全力で頑張ります！」

「あ、あの、私も、賛成、です……」

セリア、フィオンも賛成した。

「それじゃ、後はメルル、君だけだけど。……君が計画の要となるが……。この案、どうだろうか」

「ふん。何かあったらもうとつくに言っていたわ。……私もこの案に賛成よ」

「うん。ありがとう。……では全員の賛成を受けたので目標への攻撃方法はこれで行くこととする。」

では次は当日必要となる荷物の用意に関してだけ……」

こうして彼らの初めての实战の用意は着々と進んでいった。

急な話に戸惑いのあった彼らだが、ああだこうだと言葉を交わしていくうちに、お互いのことを少しずつ知り、信頼へと繋げていった。

この仲間達とならきつと出来る。そう思えるようになっていった。

……初めての戦いは、確実に近付いてきている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8617z/>

ブランジア人魔戦記

2011年12月30日00時51分発行